

目指す学校像	「子どもが伸び合い、地域に信頼される学校 ～一人ひとりのWell-being(幸せ)の実現を目指して～」 ○人が躍動する学校 ○学び舎として落ち着きと美しさのある学校
--------	--

重点目標	1 魅力あふれる授業の創造と真の学力の育成 2 自己肯定感・自己有用感を高める、安心・安全できれいな学校づくり 3 コミュニティー・スクールとして、地域とともにある学校づくり 4 教職員一人ひとりに応じた働き方改革と意欲に満ちた教職員集団の醸成
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。  
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学校自己評価			年度評価		学校運営協議会による評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	実施日令和7年2月25日
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査や市学習状況調査では、国語、算数ともに全国、市平均と比べ概ね良好な結果である。 ○市学習状況調査では、学びに向かう力等に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、学年間で相違はあるが、市平均よりやや高い。 (課題) ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、特に国語の「読むこと(思考・判断・表現)」に課題が見られる。 ○読書活動を苦手とする児童や、習慣化されていない児童が見られる。	・学びの個別最適化、探求化に向けたタブレット端末の活用 ・昨年度の研究を基盤とした、授業改善	①全国学力・学習状況調査について、児童が自己採点を行い、その結果を情報端末上のシートに入力することで、児童が自らの学習状況を把握できるようにする。 ②デジタル教科書、ドリルパーク、スタディサプリ等のアプリを取り入れた授業を実践する。	①児童が自己採点の結果を基に、自らの学習状況を把握し、目標を立て、達成に向けて行動できるようになったか。 ②学校自己評価(児童評価)において、「楽しく授業に取り組んでいる」の肯定的な回答の割合が92%以上となったか。	①全国学力・学習状況調査について、児童が自己採点を行い、その結果を情報端末上のシートに入力し、児童が自らの学習状況を把握・分析する取組を行った。 ②学校自己評価(児童評価)において、「楽しく授業に取り組んでいる」の肯定的な回答の割合が86%であった。	B	○タブレットの活用率は、全国学力学習状況調査の結果によると、全国平均と比較して高い傾向にあるが、学年間で活用の差がある。個別最適な学びにむけ、「タブレットを使用するのは教員ではなく児童」を合言葉に、タブレット端末の有効な活用事例を共有していく。	・読書で知識を身につけ、コミュニケーションを意識した取組の積み重ねが重要である。学校・家庭・地域が協働し、子どもたちにその良さを味わわせるきっかけづくりを推進していきたい。 ・幼少期から読書習慣をつけることが重要だろう。学童保育でも読書の時間をとっているが、集中して読んでいる。これからも読書コラボ給食等、アイデアのある取組を継続実施してほしい。
2	(現状) ○市学習状況調査では、「自分には、よいところがあると思う」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均を下回る学年が複数見られる。 ○児童数及び教職員数が少ないことから、清掃が十分に行き届かない場所がある。 (課題) ○児童一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングで組織的に支援・相談していく体制づくりが課題である。 ○清掃の意義を理解し、主体的に考えて行動できるようにすることが課題である。	・児童一人ひとりに寄り添った教育支援・相談に向けた校内体制の充実 ・安全できれいな学校の実現に向けた清掃活動の充実	①いじめを早期発見・解決するため、定期的な児童アンケートや面談等の記録を蓄積し、児童一人ひとりの状況を継続的に把握・支援する。 ②道徳教育の推進、児童を認める声掛けの継続等、児童の自己肯定感を高める教育活動を実践する。	①学校自己評価(児童評価)において、「先生に励ましてもらっている」の肯定的な回答割合が80%以上となったか。 ②市学習状況調査等における「自己肯定感」の肯定的な回答割合が市平均を上回ったか。	①学校自己評価(児童評価)において、「先生に励ましてもらっている」の肯定的な回答割合が78%であった。 ②道徳の授業公開、読書活動の推進等を実践した。市学習状況調査等における「自己肯定感」の肯定的な回答割合が市平均を下回る学年があった。	B	○「自分には、よいところがあると思う」の質問に肯定的な回答をした児童の割合が、市平均を下回る学年がまだ複数見られる。子どもたちの自尊感情を高めるために、よさを認め、悩みは共に解決していく教育相談体制の充実を進めていく。	
			①清掃指導体制を見直すとともに、児童が主体的に清掃活動に取り組めるよう支援する。 ②点検表に基づく安全点検を定期及び随時実施し、危険箇所の早期発見・修繕を徹底する。	①学校自己評価(保護者評価)において、関連する項目の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ②学校自己評価(児童評価)において、関連する項目の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。	①学校自己評価(保護者評価)において、関連する項目の肯定的な回答の割合が97%であった。 ②学校自己評価(児童評価)において、関連する項目の肯定的な回答の割合が97%であった。	A	○清掃時間、環境委員会の児童が清掃の模範を見せることで、清掃の取組状況がより良くなっている。今後、子どもたちに清掃の良さをより実感できるように、特別活動や道徳等の指導内容の工夫改善を継続していく。	
3	(現状) ○学校運営協議会で設定した目指す児童像「コミュニケーション力を身に付けた児童」に向け、特にコミュニケーション力の土台となる「あいさつ」に着目した取組を継続した。 (課題) ○学校運営協議会における、児童の主体的な参加が進んでいない。児童の意見が運営協議会に活かせるような工夫が必要である。 ○家庭や地域と連携した「あいさつ」運動を進めていけるよう、学校運営協議会や児童会等の活動方法を工夫する必要がある。	・目指す児童の姿を地域・家庭と共有するための教育活動の公開 ・学校・家庭・地域が連携したあいさつ運動等の実施	①学校運営協議会に児童が効果的に参加できる方法を検討し、実践する。 ②学校・学年だより、学校公開を通して、「保護者や地域に積極的に情報を公開している」の肯定的な回答の割合が93%以上となったか。	①学校運営協議会において児童の意見が共有されたか。 ②学校自己評価(保護者評価)において、「保護者や地域に積極的に情報を公開している」の肯定的な回答の割合が93%以上となったか。	①学校運営協議会に児童委員会(計画委員会)の児童が参加した。学校のあいさつ運動等について、地域と共通理解を図ったが、協議時間としては短かった。 ②学校自己評価(保護者評価)において、「保護者や地域に積極的に情報を公開している」の肯定的な回答の割合が100%であった。	B	○学校運営協議会に児童が参加する形が見えてきた。児童の取組等を知ることで、熟議の内容がより具体的かつ建設的なものに深化している。熟議の内容をより子どものために実践できるように、子どもの姿や意見を共有しながら熟議を行っていく。	
4	(現状) ○児童の欠席連絡についてICTを活用することで、保護者への出欠確認が簡略化できた。 ○業務改善が進み、会議の回数等が減少した。 ○業務改善につながるよう、ICT機器の効果的な活用方法を共有できている。 (課題) ○「報告・連絡・相談・見届け」体制の強化が継続して必要である。 ○働き方改革で生み出された時間を、教員自身のスキルアップの時間としてうまく活用しているようにする必要がある。 ○教科により、ICT機器の活用状況に差がある。	・教職員一人ひとりに応じた働き方改革の実施 ・意欲に満ちた教職員集団を醸成する学校の課題に対応した研修の実施	①働き方改革で生み出した時間を、研修や教材研究、学年会の時間として確保する。 ②月に1回「Sノーマルデー」を設定し、教職員各自が計画性をもって業務に取り組んでいるか振り返りを行う。	①学校自己評価(職員評価)において、働き方改革に関連する項目の肯定的な回答の割合が96%以上となったか。 ②教職員一人ひとりが目標を設定し、実行することができたか。	①学校自己評価(職員評価)において、働き方改革に関連する項目の肯定的な回答の割合が89.3%であった。 ②教職員一人ひとりが目標を設定し、定時退勤を実行するよう努めていた。「Sノーマルデー」に合わせて業務を計画的に進めていくことに課題がある。	B	○研修の時間を活用し「教材研究の時間」や「大学准教授による研修会」等を設定し、自己研鑽の時間の確保ができてきた。「教員が心身ともに健康な状態で児童の教育にあたる」ことができるよう、働き方改革を前進していく。	
			①「報告・連絡・相談・見届け」体制の強化。教職員等から速やかに管理職に報告し、学年主任等を中心に初動から組織で対応する体制を構築する。 ②ICT活用能力の向上を図るため、エバンジェリストを中心とする提案型研修を積み重ねる。	①学校自己評価(保護者評価)において、「児童理解」に関連する項目の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ②教員が自らの授業における課題を把握し、目標を立て、達成に向けて行動できるようになったか。	①学校自己評価(保護者評価)において、「児童理解」に関連する項目の肯定的な回答の割合が95%であった。 ②教員が自らの授業における課題を把握し、研修目標を立て、自己評価を行った。また、研究テーマごとのチームに分かれ、熱心に教育理論について議論を進めた。	A	○公開授業や授業者を囲む座談会を年に20回程度行った。授業についての意見交流等を通して、指導方法や教員間のコミュニケーションを深めることができた。教員が授業づくりを通して切磋琢磨していけるような環境づくりを継続していく。	